

博物館だより



No.163

令和2年6月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

◆博物館NEWS

①「お宝マップ」がさらに充実！
みやこ町歴史民俗博物館発行
「伝説・昔話編」が完成！

みやこ町文化遺産活用実行委員会（藤本孝彦会長）監修のもと制作を進めてきた町の文化遺産の魅力を紹介する「歴史た

んけんマップ」。第3弾となる「伝説・昔話編」がこのほど完成しました。

町内の文化遺産ゆかりの言い伝えなど「語りの遺産」を紹介するもので、特色ある7つのお話（胸の観音・おむくの墓等）を紹介しています。入手希望の方は博物館へお問合せください。

②博物館の再開をめざして… 各種のコロナ対策を準備中！

博物館では、緊急事態宣言の解除を受け、今後の館の再開に向けての準備を始めました。

「新しい生活様式」に対応した博物館の運営スタイルとして、次のような対応を検討・準備中です。
・ご不便・ご面倒をおかけ致しますが、皆さんに安心・安全に展示・収蔵資料の魅力を感じ取ってもらうための措置となりますので、ご理解・ご協力のほどお願い致します。

- ・マスク着用の徹底
- ・発熱等ある方の入場制限



▲マップとクイズが載る裏面 クイズで昔話の魅力を再確認
表面は「いほ神様」「双子石」など7話を紹介しています

・来場者の手指消毒等の徹底
・必要に応じての入場制限 など
詳細は博物館へお問合せ下さい。



▲対策の一環として受付にパーテーションを設置しました

◆講座・教室・催し物ガイド 6月以降の歴史講座について

当館主催の歴史講座（4教室）については、運営体制や環境に万全を期すため、8月一杯まで開催を見合わせることに致しましたのでご了承の程お願い致します。

なお、再開は9月からを予定しておりますが、事態の推移に伴い変動することがございますので併せてご了承下さい。

文化遺産ボランティア 養成講座(第5期)参加者募集!

今期講座は「実稼働特別編」。コロナ禍のなかで、どんな活動が可能かを試行錯誤しながら共に答えを探してゆきましよう。「町のお宝の魅力」を発信する取組が誰かの癒しとなるはずですから、一緒にチャレンジしませんか！

※当面直接行動を控え、月1回程度お知らせや資料をお届けします。申込時に詳細案内します。

※申込先 3314666へ



▲参考：第4期講座での実務体験（永沼邸除草作業支援）

4月の業務日誌から

4月14日（火）、豊前国分寺所蔵「賢劫千仏図」が修理事業に着手するとのことと立会わせて頂きました。同図は室町期の作とみられる貴重な仏画で、今後2年をかけた文化財仕様の本格修理を行うとのことです。

4月29日（水）、緊急事態宣言の発出を受け、豊前国分寺公園の遊具に使用禁止措置をとりました。子どもたちの楽しみを奪うことには気も引けましたが、その子どもたちを守るためのガマンです。



▲遊具の出入口部分にテープや掲示を取り付けました



▲国認定保存修理技術者・宰匠の皆さんと修理方針協議

みやこの歴史発見伝 126

令和とその時代 ⑦

古代のみやこにみられる
疫病と医療の歴史 ②

「医療施設」とその起源

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、最前線でウイルスと向き合う医療従事者に様々な支援と併せて感謝の言葉やエールを送る動画の配信等が行われています。

奈良時代は歴史上はじめて「病院の前身」と定義付けられる本格的な医療施設が設けられた時代ですが、その詳細はあまり知られていません。

今回は、古代の医療施設や、みやこ町にみられる水田の一部がその財源を支えた可能性などについてご紹介いたします。

施薬院と悲田院

「病院」の起源とされる施設については、聖徳太子が大阪の四天王寺に設置したと伝えられる四箇院（悲田院、施薬院、療病院、敬田院）がこれに相当するという見解がありますが、設置に関わる詳細は不明です。

奈良時代に入ると、毎年のように日照りや地震などの天災が

続き、貧窮者・病者・孤児等の人々は増え続ける一方でした。

聖武天皇の皇后、光明皇后は、これらの人々を救済するための施設として養老7年（723）興

福寺に施薬院（病人等に薬を与える施設）及び悲田院を設置しました。この12年後に先月号で紹介した天然痘の大流行が発生し、150万人以上の犠牲者が生じたという推計があります。これらの施設や医療体制が整っていないければ、さらに多くの犠牲者が発生した可能性が高いと試算されています。後にこの2つの施設は記録に残る最古の社会福祉施設として評価されています。

また地方でも同様の施設が建設され、その運営は主に国府及び国分寺等の寺院が担いました。特に寺院は設置の背景に仏教にみられる「慈悲」の思想が反映されたことがその理由とみられます。

聖武天皇は信仰の力、光明皇后は医療施設の設置に取り組むなど、天皇、皇后共に協力しながら疫病の撲滅に努めたことがうかがえます。

大宰府と「続命院」

「令和」の歌が詠まれた当時、舞台となった大宰府には九州各地（九国二島）から公私の所用のため多くの人々の往来がみられました。奈良時代は一般階層の人々に重税や兵役が課せられ、これらに対応するため本人自ら大宰府まで運搬、出向しなければなりません。しかしこれらの人々を受け入れる宿泊施設はなく、自ら持参した食料が底をつくなどの原因によって飢えや疾病等で亡くなる人々が続出しました。

このような状況を見かね、小野岑守という人物が大宰府の役人に就任した弘仁13年（822）、大宰府近郊に医療、食料の提供を行う「続命院」と呼ばれる施設を設置しています。この施設は救護・宿泊施設と食料庫などの檜皮葺屋7棟から構成された施設で、現在の救急外来に似た機能を持つものであったと推測されています。

また医療スタッフとして大宰府直属の医師及び、観世音寺の僧が治療にあたり、施設運営の財源として、壱田（新たに開墾された田地）114町が充てられたと伝えられています。この壱田は、各地に分散した形で設けられたと伝えられています。壱田の推定地の一つとみられる

のが、犀川の「続命院」です。「続命院」の地名と由来

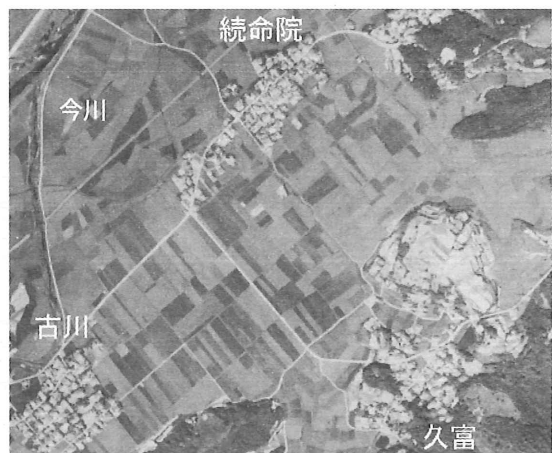
町の南西部に位置し、今川の東岸に展開する集落が犀川「続命院」です。この集落の名称は「命を継続させるための院（施設）」と読み取ることができ、古くからこの地に豊前国分寺、国府がその運営に関わった医療施設があつた可能性が指摘されてきました。それを決定付けるものは確認できませんでしたが、町民には聞きなれた「ゾクミヨウイン」の地名ですが、九州で確認できる事例としては、みやこ町を除いて県内の筑紫野市「俗明院」、佐賀県の三養基郡みやき町「続命院」の2か所のみであり、希少な地名であることが分かります。

また続命院、久富、古川地区にまたがる広い平野には、1300年ほど前に土地を碁盤目状に区画した地割の跡（条里跡）が残されており、当時から整然と整備された豊かな水田が広く展開していた可能性が高いことなどから「続命院」の運営財源を担った水田

「続命院田」を地名の由来とする説が有力視されています。また様々な見解がありますが、他の2か所の地名も壱田に由来する可能性が高いものと推察されています。

「日本最古の赤十字病院」その活動内容から「続命院」を「日本最古の赤十字病院」と呼ぶ研究者もみられます。このように当時の医療施設を運営するための財源の一部となった水田がこの町に展開し、その恵みによって当時の人々の命が救済されたことや、この町がこのような福祉事業の先駆の一端を担ったことを改めて誇りに思いたいものです。

（井上信隆）



▲「条里跡」の航空写真(1965年ごろ)